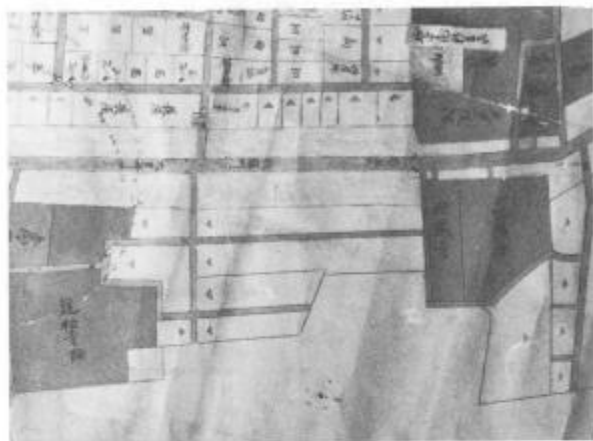


63 身代り地藏

伝承地：西原3丁目

参考書籍：1・17



(地藏寺跡周辺の古地図)

お地藏さまは、村境い、墓地、お寺などいろいろなところに建てられ、多くの人々の信仰をうけ、最も身近な仏様である。

この伝説は、今は廃寺となった時宗の寺である地藏寺の地藏さまにまつわるものである。しかし、廃寺になったときに地藏様も行方不明となって今はない。

元享のころ(鎌倉時代)、陸奥国信夫郡(福島県)に、朝はやくから、夜遅くまで

働くとても仲の良い百姓の兄弟がいました。二人とも父親の仕事を助け孝行者として近所では評判の若者でした。しかし、突然の父の死により、土地の相続のことで、兄弟は激しく争いました。そのことが、領主の耳に入り、領主はいきさつを詳しく調べさせたのち、兄の方が非道であると、直ちに捕えて、首を ねてしまいました。

兄の死を知らされた弟は、このことを深く悲しみ、ふだんから兄弟の信心していた高野山へ兄の首を携えて傷心の旅に出ました。白河の関を越え、荒涼とした那須野が原を抜け、宇都宮に来て、地藏寺に一夜の宿を乞い、その晩、死んだ兄のため一心にお経をあげました。翌朝、出発となって首箱を持ちあげようとしたが、その箱が急に重くなり、どうしても持ち上げることができません。

そこで不思議に思い、箱を開け、中を改めてみると、兄の首がいつのまにか石で造ったお地藏様の首に変わっていたのです。このことをいぶかった弟は、寺の和尚に今までの事情を話すと、和尚は、新しく地藏の体を作らせ、首とつなぎ合わせて魂を入れました。そして、しばらくの間、寺に滞在して和尚と二人でお経をあげることになりました。

月日が流れ、滞在が6か月を過ぎようとしていた時、風の便りで、斬られたはずの兄が京都の六波羅^{ろくは}にあって、元気に暮らしていることが弟の耳に入りました。それと時を同じくして兄も弟の様子を知ることができました。兄は、弟に会いたい一心で取るものもとらず、宇都宮の地藏寺に向かって京を下りました。再会した兄弟は、手に手をとって喜び、お地藏様に向かって深く頭をたれました。そして、和尚に感謝のしるしとして、この地藏尊を寄進して帰郷し、毎年、地藏尊の縁日には、2人して同寺を訪れたということです。



この地藏尊は、後に「身代り地藏」と呼ばれ、多くの人々の尊信を集めたといわれています。